

世田谷文学館

収蔵資料

調査と探究

02

石川淳

椎名麟三

「下巻」

目次

資料写真1

石川淳日記 〈昭和27年1月1日―昭和29年8月25日〉 5

石川眞樹氏インタビュー

合理的で自由、そして優しさ―父・石川淳のこと 8

資料写真2

椎名麟三講演メモ② 13

探訪 椎名麟三旧宅 16

椎名麟三の思索のあと

紅野謙介 22

「石川淳日記」

一九五二年―五四年分について 28

山口俊雄

資料翻刻1

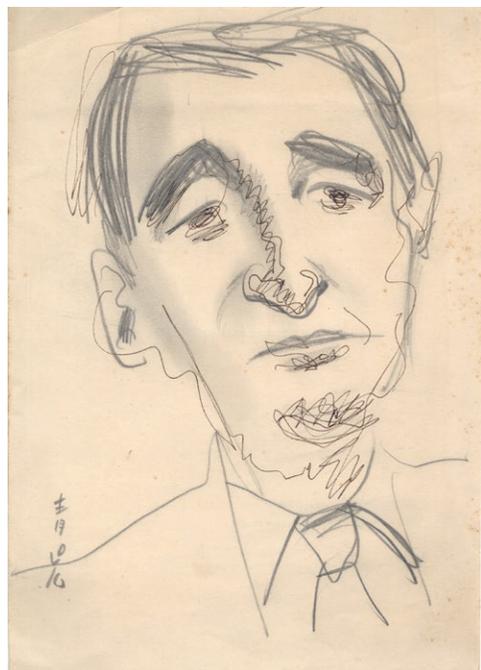
石川淳日記 〈昭和27年1月1日―昭和29年8月25日〉 39

資料翻刻2

椎名麟三講演メモ② 75

石川淳／椎名麟三 年譜 106

資料写真1
石川淳日記
昭和27年1月1日—
昭和29年8月25日



© Sampo Museum of Art, 24030

上 写真の裏書に「昭和廿七年十二月
湘南電車中にて 撮影：永井龍男」とあ
る。翌年4月9日に永井より贈られた写真

下 東郷青児画（紙、鉛筆、ボールペン／
個人蔵）。昭和28年5月20日の項(p.64)
に、「…またエスポアに転ず 東郷青児
余の似顔をかく」とある

「インタビュー」

合理的で自由、そして優しさ

—父・石川淳のこと

石川眞樹氏（石川淳ご長男）



聞き手・世田谷文学館
撮影・高橋宗正

《映画・演劇・音楽のこと》

—ご寄贈いただいた石川淳さんの昭和25年から29年の日記（以下、日記）の翻刻と公開をご快諾いただき、誠にありがとうございます。この中では上映が再開された外国映画をよく見に行かれ、演劇や音楽会にも出向かれますが、眞樹さんがご存じの頃も同じですか。

映画は一緒に行きました。父はフランス映画ではジャン＝ポール・ベルモンドやジャン・ギャバンが鼻唄。ただ「男と女」は5分で寝ちゃいました。ディズニーの「ファンタジア」*1は最後まで起きて観ていて、「よかったな」と言っていました。褒めたのは初めてですね。それから『狂風記』の頃だと思いますが、渋谷の映画館にヤクザ映画を観に行っていました。若山富三郎のだったか。『狂風記』にちらっとそういう雰囲気を感じられる（笑）。

—ご自身でヤクザ映画をわざわざ映画館まで観に行かれたんですか？

たぶん一人で。その前に僕が大学生の頃、唐十郎さんの状況劇場、花園神社に2、3回一緒に観に行きました。花園神社って知ってるかと聞かれて、何しに行くとか最初言わない。それで「その恰好じゃ駄目だ、ちゃんと花園ルックを着ていけ」と言うんです。花園ルックが何たるものかよく分からないけれど、ちょっと崩した恰好で行く訳です。

唐十郎はすごく買っていたように思います。*2

—演劇では他には？
新劇では「俳優座」。千田是也さんが好きで、俳優では市原悦子さんを若いころからすごく買っていました。安部公房さんのお芝居も全部行ったのではないですか。上野の美術館なども一緒に行きました。音楽では武満徹さん。レコードでは聴かずコンサート、「実物」で。僕が競馬の場外馬券を買ったと母（活夫人）に聞いて、「実物を見ろ、何が場外馬券だ」と怒ってたそうです（笑）。

《制度への不信と人への信用》

安部公房さんといえば、胃が悪い父を東大病院に入院させようと自ら運転されて、僕も付いていきました。車中で安部さんが「先生、保険証を持ちましたか」と聞いたら、「俺は保険というものを信用していない」って（笑）。保険なんていう考え方も嫌。その東大病院も翌々日に脱走してきて、どうしたのかと聞くと、「検査ばかりで気に入らない。治療に行ってるのに何が検査だ」って。検査しなきゃ治療も出来ないのに。確かに正論だとは思いましたけど（笑）。

—安部さんの親身な様子も伝わります。医者にかかるのがお好きでなかったのですか。
安部さんのことは120%くらい信用しているの

で、安部さんに紹介された後藤先生のごことは信用していました。僕が調子が悪いというと、「おい、この薬を飲め。これを飲めば一発だよ」と処方された薬を勧めるくらい。まだ出たての頃の「ガスター」でした。こうして一たび自分が信用したことは全部信用する、滅多に信用しないけど。

《家での様子》

あまり厳しく叱られた記憶がないですが、一度母の作った晩飯に文句を言ったら、えらい勢いで怒られました。もう一つすごく印象に残っているのは、僕が仲間と出かけて、車を駐めておいたらタイヤが盗まれて大変なことになったという話をしていたら一言ぼそっと、「馬鹿は死ななきゃ治らない」（笑）。この僕の高校時代の仲間のことを「ドラ仲間」と名づけてました。

—お子さん方のお友達が家に来られて、石川淳さんが会うこともあったのですか？ 家で読書や執筆されていると近づきたい様子かと思いましたが、ドラ仲間の尾上辰之助（初代）が来た時、「辻留」に食事に連れていってくれました。父には伝えませんでした。辰之助はよく読んでいて、『狂風記』を芝居にしたいねとか言っていました。父はドラ仲間を面白がってました。変なことして碌なことしないのが面白いと。ネタにもなったのではないかと。

——眞樹さんは以前、眞樹さんたちの若者言葉を文章に採り入れていたようだと言われていました。

そのあたりは敏感でした。テレビはドラマを一切見ず、ニュースと相撲くらい。「のど自慢」に怒るんです(笑)。それ以外、野球中継とかは我慢して、消しなさいとは言わない。茶の間でそのまま原稿書いてましたから。机が冬は炬燵になって、そこでゴロンと寝て、起きたくなったら起きて、夜中に仕事をして。「痛いよ、痛いよ」と夜中に叫んでる、胃の痛みで。「ガスター」のおかげでだいぶ和らぎましたが。

——胃痛があつても、ずっと牛肉、ステーキを召し上がられたんですね。

牛肉しか食べないです。うちは焼き焼きも豆腐と葱と牛肉だけ。それ以外の物を入れると怒られる。真夏でも毎日のように焼き焼きとか。エネルギーとして牛肉が必要と信じて疑わなかったのだと思います。胃が痛かろうと。

——お寿司も大トロ一本鎗だったそうですね。これもエネルギーでしょうか。

量は食べないんです。大トロ、それから「巻いてくれ」と鉄火巻。手巻きでは絶対なくて、簾で巻いて切ったものを周りに「食べなさいと」配る。トロと白身と、貝はせいぜい赤貝、それからひかりもの。これ以外に変なもの頼むと、「そんなものは寿司じゃ

ない、お結びだ」と(笑)。今ほど冷蔵も流通も発達していないので、合理的な理由です。今考えるところ全てが論理的、合理的、不要なもの、至らないものには手を出さない、必要であればどれだけ高くてもそれを求める、そういう合理性です。

《住むところへの考え》

——石川淳さんの戦後の住まいは、お生まれの浅草や下町ではなく、世田谷、品川、荻窪、代々木上原、初台、青山と、むしろ城西、城南エリアですね。

戦争中に六本木に住んでいた事があって(昭和18年〜20年頃)、六本木の有名菓子店で手土産を貰うとすごく機嫌が悪くなる。その主人が町内会長だったらしくて。防災訓練や竹槍訓練といった同調圧力とか一切駄目で、思い出すのがものすごく嫌だったんだと思います。麻布の辺りにもいい印象がなかった。初台の家から移るために母と家を探した時、麻布の方に良いマンションがあったのに苦虫を噛みつぶしたような顔して(笑)。それから母の話では、若い頃に鎌倉で苛められたらしくて鎌倉も好きでなくて。

——「自分の家を建てる」という発想を持たなかったのですか。

家を持つとか、資産を持つとか、一切ない。どうでもいい。雨露をしのげればなんでもいい。「俺は

聴)さんが、今ほど有名になる前の「越乃寒梅」を航空便で送ってくれたら保険が付いてたと驚いてました。*3 ホテルのバーに一緒に行くと、こういうところでビールだけは頼むな、こういう場ではウイスキーを飲んでいたら間違いないと。それはおそらく本人が思う品格に則ったことでしょう。TPO、マナーに結構うるさい。マナーを「マナー」と言うので母が面白がっていました。

《フランス語への思い》

——古典籍、原書など、後年も本はご自身で買いに行かれたのですか？

勿論、自分で行きました。洋書は日本橋の丸善、神田などの馴染みの古書店。

——フランス語といえば、眞樹さんが小さいころ、直接教えていらしたとか。

「楽しいフランス語」というテレビ番組があつて、パリの劇場で俳優、演出家として活躍したニコラ・バタイユや、フランソワーズ・モレシャンとかが講師で。それで「おーい、フラ始まったぞ」と。僕は逃げまくって居なくなりました(笑)。

——そういうときも石川淳さんはテレビ前に端座して聴いておられたんですか。

そうですね。ものすごくフランス語は大事にしていましてね。教科書で教えてもらったことも2、

新宿の駅前の広場で、原稿料貰ったまま一晩寝たけど何ともなかったぞ」と自慢するんです(笑)。

——生まれた浅草のことや、淳さんの祖父母や両親のお話など聞かれたことはありませんか？

いいえ。そういう話題にならなかった。長命寺の桜餅とか、どぜうの話くらい。長命寺の桜餅は昔からお土産に買ってきました。それから空也の最中。人に配るのが好きで、家族が美味しそうに食べるのを見ているのが好きなんです。自分では食べない。羊羹を持ってきた人のことを「気の利かねえ奴だ」と言っていました(笑)。

——やはり辛党。お酒は何でも呑まれましたか。

日本酒ですね、菊正(宗)。丸谷才一さんの故郷の「初孫」はうまいと言っていました。瀬戸内晴美(寂



昭和45年、初台の家で 撮影：榎本良介

3回ありましたけど、音読すると僕の方が発音が良いので、僕の前では絶対音読しませんでした(笑)。フランス語はとにかく好きで晩年もずっと原書を読んでいました。1980年代のフィリップ・ソレルスらが出始めの頃、僕が大学でフィリップ・ソレルスを読んだと言ったら、「それ結構面白いよ」と。何で知ってるんだと思いました(笑)。

——漢籍や素読をと仰られたことは？

それはないです。言い出されたこともないです。

——大正13(1924)年にフランス語講師として旧制福岡高校に赴任されたとき、和文仏訳で漱石の「夢十夜」を出題されたとか。

一度だけ「漱石と鷗外とはどうですか」と聞いたことがあるんです。「鷗外はすごいよ。実生活でも上り詰めた。漱石はロンドンで頭をやられた。その差だ」と言っていました。だから書いているのはほとんど鷗外について。ただ漱石も尊敬をしていたと思います。それから芥川、谷崎、そして勿論、荷風。ものすごく好きで尊敬していたから最後がっかりしたんでしょう。父の合理性、論理性からいったら、荷風の晩年は納得できなかったのではないのでしょうか。

——眞樹さんが読んでいた本に関心を示されたことはありましたか？

僕が何を読んでいても、何を読めとは絶対言わない。

とにかく本を読め、本の種類は何でもよいからと。父も、将棋をしているとき以外、昼間は殆ど本読んでましたから。感心するのは、読むときは必ずピシッと座って、決して寝転びながらとかではない。

《公平さと自由さ》

六本木に行った時、近くのソ連大使館の連中が派手に遊んで飲んでいて、共産国の固いイメージもあつたので「大きい顔して遊んでた」と言ったら、「どうしてソ連の連中が遊んだらいけないんだ」と。ハッとしました。公平なんです。

——革命に共感を寄せられていますか、東京で学生運動が盛んだった時はどういう様子でしたか。

反乱、革命大好きです。勿論すごく共感していましたが、活動団体から機関紙が送られてきたり。かといって、僕が運動に関わったら嫌な顔したでしょう。「お前なんかにあんな洒落たこととはできるわけない」と高括っていたでしょう(笑)。体制とか権力に対する反発、反抗を形にして示すことは、絶対的に必要なことだと思っていたと思います。本当に自由なんです。ただ未だに一つ謎なのは、大学のフランス語の授業でマルクスの「資本論」だったか「共産党宣言」だかを読むらしいと話したら、「そんな下らないものやるんじゃない、何の役に立たない」と言ったんです。真意

はわかりませんが、学生の運動には共感しても共産主義に対してまた別だったのかなど。大事なものは自由なのに、もうその頃は共産主義に自由があるとは思えなかったのか。ベルリンの壁崩壊の時に生きていたら、話を、感想を聞きたかったですね。イデオロギーに関して、他者に押し付けることはなかったです。

《認めたものへの優しさ》

何かのインタビューで「戦後は貧乏されましたか」と聞かれて、「俺は貧乏はしたことはない、金が無かっただけだ」と(笑)。

—それでも日記を見ると出版社で前借して若い作家に渡してあげたり。加藤周一さんはフランスからの手紙で、原稿を出版社に届けるお使いを頼んでいます。

—そういう気遣いというか、優しいところがありましたね。加藤周一さんをとっても評価していました。『夕陽妄語』を読むと、父と思考回路が似ていたとわかります。瀧澤龍彦さんもととても買っていました。

—初台の家に訪ねて話し込まれる作家の方はいましたか？ 日記の頃は安部さん、島尾敏雄さん、福永武彦さんなどの若い作家に会われています。

初台の家には安部さんくらい。でも福永さんも認めていて好きでしたね。テレビで野坂昭如さんが

早口で喋ってるのを見ながら「あの喋り方がいいんだ」って。認めている人のことは全面的に受け入れる。三島由紀夫さんのこともイデオロギーは全く違ってはいたけれど好きで認めていたから、追悼文*4では何とか理解を示そうとしたんでしよう。一つ認めたら全部認める、そういうところも本当に優しい人でした。

—ところで、今はできるだけ幅広く読んでほしいので、新仮名、常用漢字での出版でOKしています。が、父本人は新仮名、常用漢字では絶対駄目な人なんだとつくづく思いました。

—下の世代の著作は殆ど新仮名、常用漢字ですが、何か言われましたか？

他の人がすることにはこだわりませんでした。安

部公房さんが使い始めた初期のワープロなんか、恐れ入ってました。「ああいうもので、よくまああれだけの文章が書けるものだ」と。感心、尊敬の念。自分ではできないから素直に受け入れて、頑なさにはなかったです。

2024年10月24日、世田谷文学館にて

*1 「イメージと図式」(「虚一盈」所収。初出「東京新聞」1955年10月10日)で言及。「ファンタジア」の日本公開は同年9月23日

*2 『石川淳全集』月報9(1990年1月)掲載の扇田昭彦「石川淳と唐十郎をつなぐもの」で二人の相互影響が示唆されている

*3 瀬戸内晴美「菊富士ホテルからの子へ」(「すばる」1988年4月臨時増刊「石川淳追悼記念号」)に詳しい

*4 朝日新聞夕刊「文林通信」1970年12月24日・25日



*写真2枚とも年月日、詳細不明。



探訪 椎名麟三旧宅



1階の応接スペース。暖簾の奥には電話があり、編集者に締切の遅延をよく謝っていたという



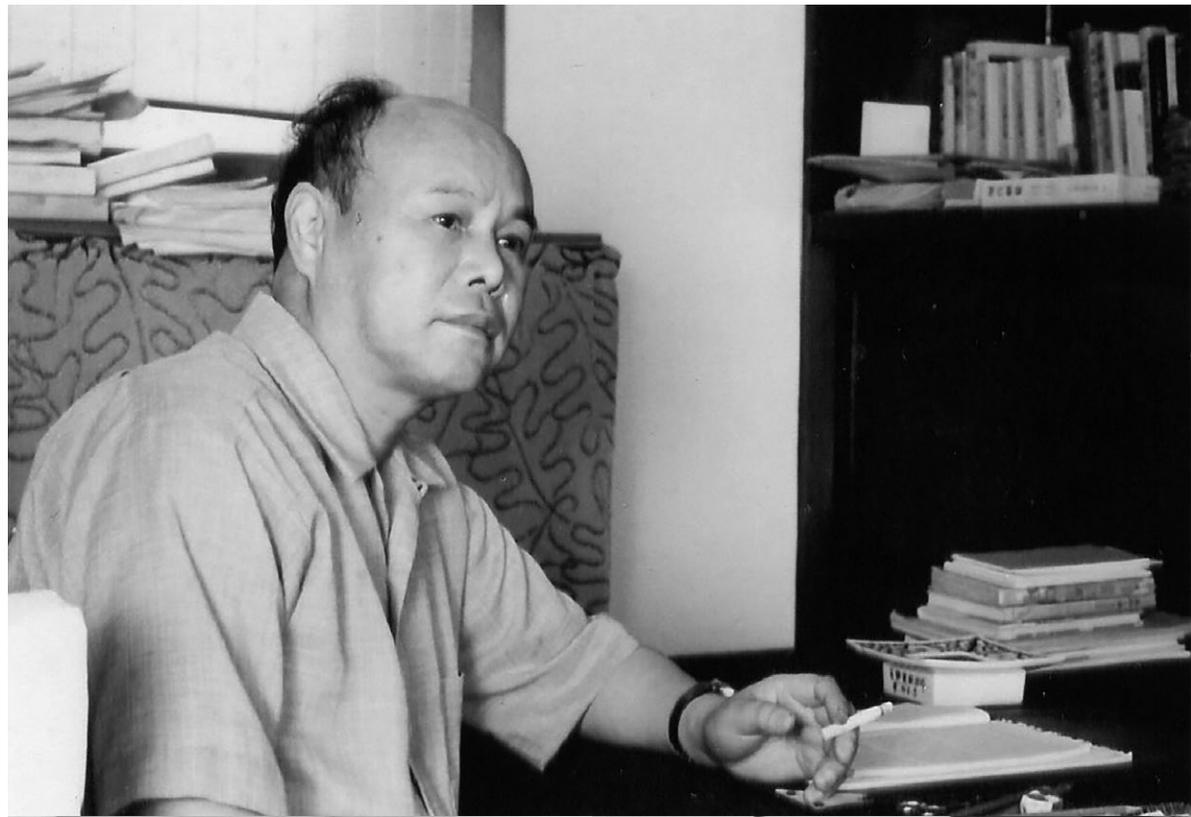
2024年7月19日 世田谷区松原
撮影：栗原論

2階の書斎へと続く階段



一日の苦学は
十日の一日だけで
十分である
権左衛門

長年執筆をした書斎



自宅での椎名麟三



(上) 愛用の筆記具など
(右下) 夫人に用があるときはこのベルを呼び鈴代わりに使ったという
(左下) 愛用の電気ストーブ